

きのくに自主防災

(平成20年3月号)

<発行元>

和歌山県自主防災組織情報連絡会事務局

(県庁総合防災課内)

〒640-8585和歌山市小松原通1-1

TEL: 073-441-2271



下記の内容は、平成19年12月15日、広川町立耐久中学校体育館で開催された「和歌山県防災啓発研修」の内容を抜粋したものです。本研修では、講師による基調講演と4名のパネリストによるパネルディスカッションを行いました。

過去の災害の教訓を活かし、将来の災害に備えるため、防災についての教育が重要となります。そこで、これまで防災教育に取り組まれた方がどのような課題を克服し、成功へ至ったか、その過程や成果を紹介することにより、防災教育の広範かつ継続的な取り組みの推進を図ることを目的として開催しました。

◇ 基調講演

「かけがえのない命を守るために
～防災教育に取り組もう～」

京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授

林 春男 氏



防災教育について話をさせていただきます。防災教育とは、私たち自身が、自然災害に対する自分たちの防災力を向上させるために行う意図的な働きかけ、

自ら守ることが困難な人を支援するために行う意図的な働きかけ、広く人生の危機に立ち向かい、それを切り抜ける力を育てることです。それを家庭・学校・社会という場で行うことが重要です。

防災には次の二つの目的があります。一つ目の目

的は被害が出ないようにすること、二つ目の目的は出てしまった被害をできるだけスムーズに復旧・復興することです。残念ながら、東南海・南海地震が発生した場合、広川町の被害はゼロではありません。そこで、災害対応の力を高めていくためには、どういう状況でどんな被害が出るのかを考えることが重要です。被害が出るかどうかは二つの異なる要因の組み合わせで決まります。二つの要因とは、「ハザード」と「地域の防災力」です。「ハザード」とは自然による被害です。地震や台風、いろいろな種類のハザードがあります。「地域の防災力」よりも「ハザード」が大きければ被害が出ます。

防災というのは「ハザード」についての理解を深めるとともに、自分たちの地域の防災力を高めることが重要です。また、被害が出てでもできるだけ小さくすること、つまり被害軽減力が重要となります。そして、防災に関する取り組みは、継続的に行う必要があります。また、過去の災害の教訓を活かし、

未来に備えていくことが重要となります。東南海・南海地震は発生します。だから何をしないといけないのか、いつどこで、どれくらいのことが起きるのか予測してみてください。

2035年前後に東海・東南海・南海地震が発生するであろうと言われています。2035年前後に地震が発生するとしたら、それを乗り切るために力を発揮するのは、1980年以降に生まれた人達です。私たちの世代は、次の若い世代の人たちに真剣に東海・東南海・南海地震等について話をしていかなければなりません。

地震は同じ場所、同じ規模で繰り返し発生する性質があります。過去に大きな地震が発生した地域は、将来も大きな地震が発生すると考えなくてはなりません。これから発生が予測されている東南海・南海地震は、世界で最も多く発生が記録されています。過去1300年間、ほぼ100年に1回の間隔で発生しています。自然の事象というのは規則的であり、ある程度発生が予想できます。予想の結果、次の地震は2035年に発生するのではないかとされています。1割程度の誤差を考慮すると2035年±10年と言われています。その時、皆さんはいくつ



ですか。今、若い人は若くありません。今主役の人たちは要援護者です。

2035年前後に地域の防災力を担っているのは今の学生達です。その時まで、いかに時間を有効に活用するのが重要です。

今後日本は高齢社会を迎えます。そのような中、地震を乗り越えていかな



ければなりません。地域の防災力を上げて被害を抑え、復旧・復興をスムーズに行う必要があります。そのためには地震による被害を知っておく必要があります。どのような災害でも繰り返し起こることがあります。80%程度の問題はあらかじめ知っていれば対応できるものです。災害時の対応については、100点を取る必要はありません。合格点を取れば良いのです。死ななければよい、けがをしなればよいのです。一つ一つ問題を解決し、被害を抑えること、そのようなことを進めるのが防災教育です。学校や地域、あるいは県全体でいろんな機会を持つことが必要です。そしてこのようなことは能動的に行わないと意味がありません。これは自分のため、大事な人のために行うのです。自分のため、大事な人のために、自分が問題を出して、考えて、その答えを探していくことが重要です。

◇ パネルディスカッション

「防災教育の実践事例」



兵庫県立舞子高等学校環境防災科教諭

諏訪 清二 氏

5歳の時、阪神淡路大震災で亡くなった女の子がいます。そのおじいちゃんが倒壊した家からプランターを取り出し、その朝顔を学校にあずけました。命の大切さを朝顔にたくしたのです。その女の子が通っていた小学校では、6年生になると防災の勉強をします。命の大切さを勉強するとともに、この朝

顔を育てます。そして朝顔の種を次の6年生に渡します。私は朝顔のつながりが防災教育のつながりだと考えています。

災害は、自然と社会の両方が合わさって発生します。自然環境のことを学ぶことも重要ですが、社会のあり方についてしっかり学ぶことも大事です。社会について学ぶこと、どのように生きていくかを考えるのです。

ハザードよりも地域の防災力が低ければ被害がでます。台風などの自然現象はコントロールできません。しかし、地域の防災力はコントロールできます。地域の防災力を強くすれば被害を抑えることができます。

机に向かって勉強するのも大事ですが、外に出て勉強することも大事です。様々なところに出向いて行って勉強すること、現物を見て勉強することが大事です。

舞子高校では小学生に防災を教えています。自分たちで学んだことをわかりやすく小学生に教えたり、自分の避難所の体験を話したりしています。人に教えることで自分も教えられます。

私は将来の夢と防災をつないでみようと言っています。幼稚園の先生、犬の先生など様々な夢があります。幼稚園の先生になって園児に防災教育を教えたり、犬の先生になり、レスキュー犬を育てたいという生徒もいます。自分の夢と防災をつなぐことが防災教育を継続する力になります。

国際交流として、ネパールやスリランカにも行き、防災について、現地からいろいろなことを学んだりしています。

広川町立広小学校長

福田 正幸 氏

広小学校の防災教育についてお話しさせていただ

きます。広の町は濱口梧陵の育った町で、稲むらの火の舞台になった土地です。稲むらの火を象徴する銅像や、梧陵がつくった堤防、稲むらの火祭り、津波祭り、4月にオープンした稲むらの火の館など、この地域には防災教育を進めていく資料・教材が数多くあります。その地域性を活かして防災教育に取り組んでいます。

防災教育に取り組み始めたのは今から5年前です。次から次へと起こる国内外の災害や、今後発生が予想されている東南海・南海地震に備えて防災教育に力を入れ始めました。従来の取り組みだけではなく、子ども達を守るために、子ども達の「自分でできることをしよう」という心を養うため、防災教育に取り組んでいます。本校の防災教育の目標は次の4つです。「災害に対する対応力」、「地域のために」、「災害に対しての知識理解」、「命を大切に作る心」です。この目標を達成するために、教科、道徳、総合的な学習の時間などを活用しています。そして、頭と心と体で防災教育に取り組んでいます。

防災教育に取り組んだ結果、子どもたちの命を大切にする意識、防災意識、災害対応能力は高まりつつあると思います。防災教育を通じて、人を見つめ、地域を見つめ、家族を見つめ、食、福祉、人権を見つめる目が育まれていると思います。防災教育は、子どもたちの生きる力を養う大切なものだと思います。



<稲むらの火の館>



<広村堤防>

田辺市立新庄中学校教諭

榎谷 節生 氏

7年前から防災教育に取り組んでいます。新庄中学校では、地域の方、在校生、地域の小学6年生を招いて発表会などを行っています。学んだことを学校だけでなく、情報発信することが必要です。私たちはどんどん地域に出て活動しています。防災カルタ、寸劇、防災英語パンフレットの提供、替え歌、すごろくゲームなど、学ぶというより一緒に楽しむという形をとっています。

これまでの成果として、生徒自身が地震・津波に関する知識と理解が深まったこと、それに対応できる力を体験的・課題解決的に育てることができたことです。そして、9教科で地震に対して学習することにより、一年間を通じて学習できたことです。地域との連携を深めて、他の学校に情報を発信し、地域の基盤が再強化されればと考えています。

新庄地震学に対する評価として、2004年に防災教育チャレンジプラン大賞を受賞しました。同年、子ども防災甲子園に入賞もしました。2006年にはアジア防災教育子どもフォーラムで防災教育実践事例最優秀賞も受賞しました。

今後の課題は、この取り組みがマンネリ化しないこと、そしてこの活動を10年、20年と続けていくことだと思います。

和歌山県立田辺工業高等学校生徒

中松 由衣 さん

震災時、自分の命を守る自助が大事ですが、自助だけでなく、共助も重要になります。災害時のみ、助け合うことができるかというところではありません。そのため、地域のつながりが大事だと思います。

あけぼの町には一人暮らしの高齢者が多く住んで

います。震災時は、いろいろ大変なことが多いと思います。私たちにできることがあればと敬老の日にはハガキを送ったりしています。去年は年賀状も送りました。新潟県中越地震と新潟県中越沖地震の時は、募金活動を行いました。直接、新潟県にもっていき、そして、現地でボランティア活動を行いました。

また、学校の防災訓練をあけぼの町内会と共催し、消防署・自衛隊・病院・警察など多くの関係機関の協力を得ました。あけぼの町内会の皆さんも大勢参加していただき、その中で私たち高校生ができることとして、あけぼの町内の老人宅を訪問し、避難誘導をしています。

最後にボランティア活動を通じて地域の方とつながりをもつことが有事の際、大きな意味をもち、またつながりをもつことによって人に優しい社会をつくることができると思います。

パネリストが防災教育に取り組んできた中で、苦労したことや防災教育に対する思い。

榎谷 氏

障害になっているのは予算、時間、進学です。新庄中学では3年生が取り組むことなので高校入試のからみもあります。

防災教育に取り組むことで、子どもも勉強するし、私自身も勉強します。教師が逃げたら勉強できません。私自身もニュースとか新聞とか、地震に興味を持つようになりました。考え方が変わったと思います。

福田 氏

広の地域性のため、防災教育はずっと続けていかなければいけないと思います。稲むらの火の館もでき、稲むらの火の話は世界的にクローズアップもさ

れました。

ここでは防災教育を実施しているという目で見られます。それが問題と言えるかもしれません。この地域はいろんな方が指導に来てくれたりします。また、学校が忙しい時期に依頼があったりもします。それらが良い面であり悪い面だと思います。

諏訪 氏

全国唯一の環境防災科としてのプレッシャーがあり、障害は継続ということです。継続には学校としての継続と個人としての継続があると思います。学校は学力が重視されます。防災の勉強をしていると他の科目の勉強ができないと思われています。しかし、防災に関心を持って、取り組むことにより様々な経験をします。それが人を成長させると思います。

中松 さん

毎年新しいことにチャレンジしてみたいと思います。時間も限られていますし、先生方に意見が通らないと活動ができません。来年の生徒会の人たちには、これまでの活動だけでなく、新しいことにチャレンジして欲しいと思います。

コーディネーター 林 氏による総括

防災教育が進んでいる成功例がこの4校であると思います。これらの活動を阻害する要因はたくさん出てきます。私たちが期待しているのは、成功例をたくさん見ていただき、そして、それを取り入れていただくことです。教育とはいいものをまねることから始まるものではないかと思います。一つでも自分でできることを見つけていただき、防災教育を充実していけたらいいのではないかと思います。防災教育を実践する人と、それをつないでいく「つなぎ手」の養成が非常に大事です。そうでなければ個々で活躍している先生達が孤立してしまいます。私たちは、防災教育の教材として使っていただける中身を充実させて、防災教育を始める敷居、続ける敷居を下げようとしています。お互いの活動を認め合い、また、発表する場も増やしていきたいと思います。防災教育を通じて生きる力を養っていきたくと思います。防災教育はこれからの20年～30年の和歌山にとっては格好の教材となります。

最後に本日ご参加いただいたみなさんには、自分のこととして、地域の安全のため、活動して欲しいと思います。

地球深部探査船「ちきゅう」とは!?

「ちきゅう」は、人類史上初めてマントルや巨大地震発生域への掘削を可能にする世界初の船です。「ちきゅう」は科学史上初めて東南海・南海地震の震源まで掘削し、そこを直接観測し、地震がなぜ発生するのか、そのメカニズムを解明します。また、掘削した孔（あな）には観測装置を設置し、地震発生と同時に、その情報を陸上へすばやく伝えるシステムの構築を目指しています。南海トラフでの巨大地震発生メカニズムの調査のため、熊野灘において昨年9月から本年2月上旬まで科学掘削を行い、今後も引き続き調査が行われます。

また、新宮市の新宮港が「ちきゅう」の寄港地となっております。

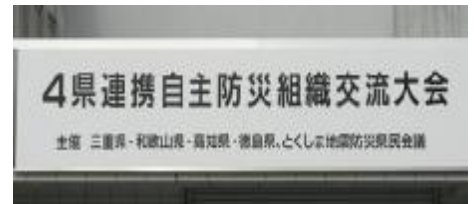


～防災活動ひろば～

平成20年1月19日（土）に三重県、和歌山県、徳島県、高知県の自主防災組織の代表者が参加した「4県自主防災組織交流大会」が徳島県徳島市で開催されました。

「4県自主防災組織交流大会」は、「東南海・南海地震」に対し共通の課題を持つ4県の自主防災組織で活動されている方々が一堂に会し、先進的事例の学習や意見交換を通じて、相互の防災力の向上を図ることを目的として開催しています。

昨年2月の和歌山市での大会に続いて、今回が3回目の開催です。今大会は三重県から1名、和歌山県から2名、高知県から4名、徳島県から3名の自主防災組織の代表者が参加し、活動の事例発表等がなされました。その内容をご紹介します。



三重県亀田市和田自主防災会

地震が発生した時には隣近所の安否確認をお願いしていました。しかし、2007年の三重県中部地震が発生した時、自主防災会は何もできませんでした。県が行っているリーダー育成事業を受講した3名だけが各家庭の安否確認を行ったのが現実でした。

6月に避難だけの防災訓練を行いました。安否確認について、組長さんに報告していただくという訓練でした。実際、訓練を行うと、開始9時にもかかわらず、8時頃から地域の人達が集まってきました。訓練を行うというので、様子を見にきたのです。訓練では、集まっていた方に参加報告をいただくだけでしたが、かなりの時間がかかりました。すべての報告が完了したのは9時30分頃でした。自分が参加したという報告の受付だけで30分もかかりました。訓練の後、声かけもスムーズにできなかったということで、防災マップを作成し、区民に配りました。そして、安否確認を短時間で行うために、防災マップを見ながらグループを再考し、今までの組数を大幅に増やしました。古い住民表を一覧表に

して、高齢者の一覧にし、地震の際の要援護者の名簿を作成しました。

和歌山県那智勝浦町北浜区自主防災組織



私共が取り組んでいる内容について報告させていただきます。

まず、組織体制強化の基本は次の3つだと考えます。

「自分の身は自分で守る」・「頼りあうより助けあいを」・「自分たちの町は自分たちで守る」です。私たちは、自助と共助の心構えを持ちながら、安全、安心な住みよいまちづくりを目指して平成16年6月から本格的な取り組みを始めました。

そして、平成16年9月5日の紀伊半島沖地震が我々の取り組みに大きな転機をもたらしました。丁度、那智勝浦町自主防災組織の合同研修会が行われた日の深夜に地震が起こったので、とても印象に残っています。

高知県旭町自主防災組織

当時、北浜区内には津波緊急避難所がなく、区民から苦情が相次ぎました。これが具体的な取り組みを早急に始めるきっかけになりました。

組織の体制として、非常時に区民を迅速に安全な場所へ誘導することが一番大事と考え、組選出防災委員体制の構築と要援護者対策として防災対策台帳作成に先ず取り組みました。この台帳の取り組みについては、プライベートな内容もあるため強引な取り組みは行っていません。また、人命救助の責任を負うというのはとても難しく、津波等による二次災害も考えられるため、現時点では要援護者の支援者を設定しないことにしています。

次に避難場所と訓練の状況についてです。

避難場所は地区内にある小山3ヶ所を指定していますが、いずれも山地であるため、区の主体で、年3回は避難訓練を兼ねた草刈りを行っています。また、手すり等の必要な場所については、間伐材等で整備を進めています。このように「自分たちの命を守る避難場所は自分たちで」をモットーに取り組みを行っています。今後の取り組みについては、避難場所へのトイレ確保と車椅子で登れるスロープ整備等が課題となっています。

また、避難訓練は平成16年以降、毎年継続して行っています。

組織の体制強化を進めるための課題は山積していますが、災害時の犠牲者ゼロを目指して、今後も真剣に取り組みを続けていく所存です。



高知県宇佐町では、短時間で津波が襲ってくるため、住民は自ら避難場所の用地を購入し、手作業で避難場所を建設しました。建設作業には、涼しい時期を選びました。11月から5月まで、毎週日曜日、朝8時から昼12時まで作業を行いました。住民は交代制で全員参加でやりました。そのおかげで海拔36mの山頂に広場が完成しました。この広場の一角には防災倉庫、備蓄小屋を建設しました。そして、備蓄小屋の中に収納ケースを置きました。そこには、非常食糧を備蓄しています。非常水はタンクに入れ、500L保管しています。将来的には2000Lまで増やしたいと考えています。

要援護者、高齢者避難対策についてですが、津波到達時間を住民の頭の中にたたきこむことが大事です。今まで町内を8班に分けていましたが、それをさらに細分化し33チームに再編成しました。要援護者がスムーズに避難するためには避難用具が重要となります。理想的な道具は車椅子だと思います。押す側も押される側も楽です。そのため、車椅子を町内に12台配置しました。車椅子は、怪我や病気のときにも使うことができるよう、家の中に置かず、軒下に置いています。

次に、ブロック塀対策について話します。狭い道路に沿って6段、7段のブロックが並んでいます。これを4段に低くする運動を進めています。自主防災会のメンバーで、6～7段のブロック塀を4段にし、鉄筋をいれました。費用は専門家をお願いすると何十万もかかりますが、自分達でやれば、格段に安く済みます。これを順次進めていきたいと思えます。

最初はまったく無関心だった住民でしたが、避難所づくり等の作業をきっかけにしてコミュニティーの絆が深まったと思います。

高知県全体でも避難場所や避難タワーは不足しています。行政頼みの整備ではなくて、自分たち住民が動くことが大事です。

徳島県鳴門市自主防災会連絡協議会

津波に関することでお話しさせていただきたいと思います。電動の門がありますが、停電するとその扉は閉まりません。非常電源もわからず、門の閉め方がわからないこともありました。また、現場に30～40分かかると鍵を持っていました。そんなことでは津波には間に合いません。そして、4箇所の避難所がありますが、この避難所は津波の浸水区域でした。そのため新たに避難所を設置しました。

里浦小学校で地域の立体的地図の模型を作りました。子ども達は模型を作っただけでなく、自分たちで地震や津波の仕組みなど、次々と学習を進展させました。

毎年、全校生徒の前でお話しさせていただいています。今回は緊急地震速報とその対応でした。また、運動会では、防災バケツリレーで大勢のご父兄にご参加いただきました。

婦人会においても様々な取り組みをしていただいています。公民会によって、炊き出しなども行いました。お母さん方による防災ずきんづくりも行いました。小学校と共同で津波訓練も行いました。避難訓練ではジャッキを使っての救出訓練も行いました。

最近は家具の固定、転倒防止に力を入れています。家具固定の必修パネルを作って講習を行っています。家具の固定に係る工具の貸し出しセットを作って利用してもらっています。自主防災組織連絡協議会の周知を「なるとの祭り」などで周知しています。また、テレビの30分番組で講演も行っています。

自分の命を守り、地域を守るのは自分達であると思っています。

トピックス 防災・きのくに東西南北

自主防災組織関係者や紀の国防災人づくり塾修了者など、地域で防災活動に取り組まれている皆様の活動事例を本会報誌でご紹介させていただきたいと考えています。つきましては、皆様より活動事例を募集したいと考えています。活動事例をご紹介いただける方がございましたらメール、FAX、郵送にて下記までお願いします。

なお、紙面の都合により、ご提供いただいた方すべての原稿を掲載できない場合や原稿を修正させていただく場合もございますが、予めご了承ください。字数等については、1200字程度でご検討いただければ幸いです。また、活動の写真もご提供いただけましたら、原稿とともに掲載したいと考えています。

記

- 1 提出先 和歌山県自主防災組織情報連絡会 事務局（和歌山県危機管理局総合防災課内）
- 2 提出方法 E-mail : e0114001@pref.wakayama.lg.jp FAX : 073-422-7652
郵送 : 〒640-8585 和歌山市小松原通1-1 和歌山県庁危機管理局総合防災課 行き

***活動事例を会報誌に掲載させていただく場合に、県総合防災課からご連絡させていただく場合もございますので、住所、氏名、電話番号を必ずご記入のうえ、原稿をご提供いただきますようお願いいたします。**

【お問い合わせ先】 和歌山県危機管理局総合防災課 防災企画班 TEL : 073-441-2271